

## 「伝道を始める」

2015年05月09日

ルカによる福音書 4章14節～15節。イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた。その評判が周りの地方一帯に広まった。イエスは諸会堂で教え、皆から尊敬を受けられた。

主イエスは悪魔の誘惑を退け、神の言葉への全き信頼に立って伝道を始められた。洗礼者ヨハネが捕えられ、主イエスの時が到来したのである。最初の伝道地はガリラヤであった。ガリラヤは主イエスの故郷ナザレに近い、イスラエルの北、ガリラヤ湖周辺で、都エルサレムからは軽蔑された田舎であった。諸々の文化が流入していた地域で活気に満ち、また穀倉地帯でもあった。ガリラヤ人はペトロに代表されるように血の気が多く律儀な気質であった。しかし、民衆はローマ帝国、領主、神殿などから重く課税され貧しさに喘ぎ、社会的、政治的にも差別、抑圧されていた。主イエスがガリラヤを最初の伝道地にしたのは苦難を負わされた民衆に救いを与える意図を持っておられたことは明白である。

ルカ福音書は「その評判が周りの地方一帯に広まった。イエスは諸会堂で教え、皆から尊敬を受けられた」と簡略に記している。主イエスの伝道は形式的、権威主義的なファリサイ派の教えとは違い、生きることを喜び合う具体的な出来事であった。また、会堂の中だけでなく、人々が生活している現場で神の恵みのリアリティを鮮やかに示され、民衆は歓喜して群がった。

マタイ福音書は、主イエスの伝道の第一声は「悔い改めよ。天の国は近づいた」、マルコ福音書は「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」であったと書いている。両福音書の記述が事実に近いのではないか。

マルコ福音書から、主イエスの伝道の意図を探ってみたい。まず「時は満ちた」と語り始めている。聖書では時に関して、全ての人に平等に与えられている自然の時(クロノス)と、神が歴史に介入した神の時(カイロス)を使い分けている。主イエスはカイロスが来たと宣言している。

二つ目は「神の国は近づいた」である。「神の国」とは神が生きて働いている事態である。事態は観念や理念ではなく、生きておられる神が見え、体験できる状態をいう。ルカ福音書17章21節に「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」と記されているように、神の国が主イエスの出現によって「福音」として到来したと宣言している。

三つ目は「悔い改めて福音を信じなさい」である。「悔い改め」は方向を転換することである。福音へと向きを変えて信じる。それでは、信じるべき「福音」とは何であるのか。それが最も重要な問題となる。「福音」は神が共におられる(インマヌエル)事実である。神が共におられるということは、罪が赦され、神に絶対的に是認されていることである。自分自身を受け入れられないと拒絶しようとも、他者から私の存在を否定されようとも、神は主イエスにおいて「よし」と宣言して下さっている。そして、この宣言は私だけではなく、全ての人々に及んでいる。だから、互いの生を受け入れ合って共に生きる。これがインマヌエルの「福音」である。この福音は当然、人間を蔑み、否定する言葉と行いに対し断固として異議を唱えていくものとなる。

主イエスは神の時が来て、神の国が到来した、全ての人を「よし」と是認する福音が現される、この福音に心と体を転換せよと、伝道を開始されたのである。